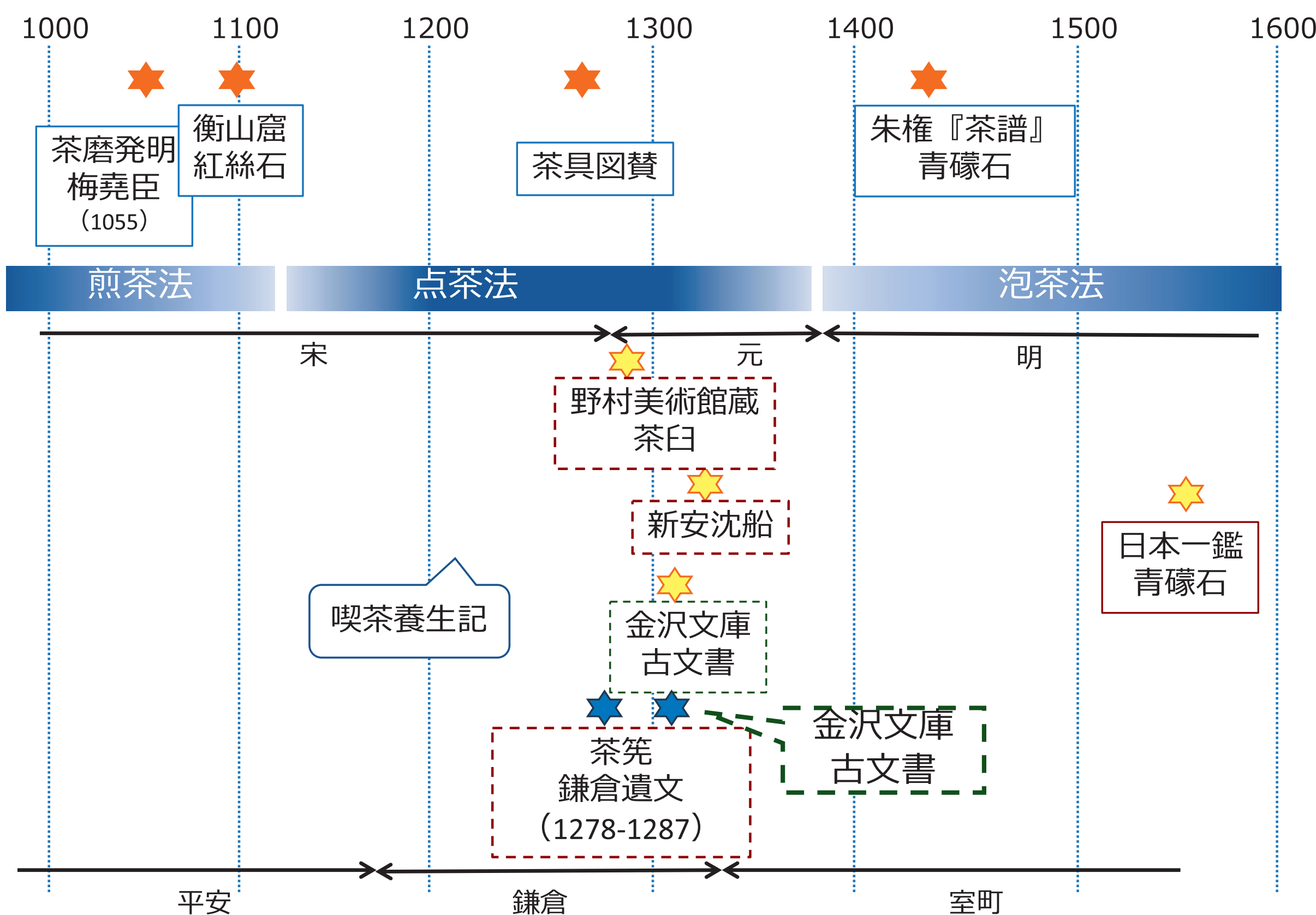


日本における茶磨の受容（2）

茶の飲用法の変遷（中国における茶磨）

- ・唐代より中国では、茶は専売制度で取引されていた。これによる利益は、対外的な防御に用いられた。宋代では、茶の専売制度を「茶法」という。
- ・対外的な防御の傍、茶は貿易品として貴重なものであり、諸外国へ輸出された。シルクロードの交易品の一位は絹であるが、二位は茶であり、遠くペルシャまで運ばれた。日本へも、寧波を通して茶・茶文化を輸出した。

中国・日本における茶臼関係年表



・初期の茶磨の原料である紅絲石は、黄褐色に赤色の糸状の模様が特徴である。硯に使用される。模様が美しいが柔らかい。蘇軾「次韻黄夷仲茶磨」（1088）の詩「歳久講求知処所、佳者出自衡山窟」

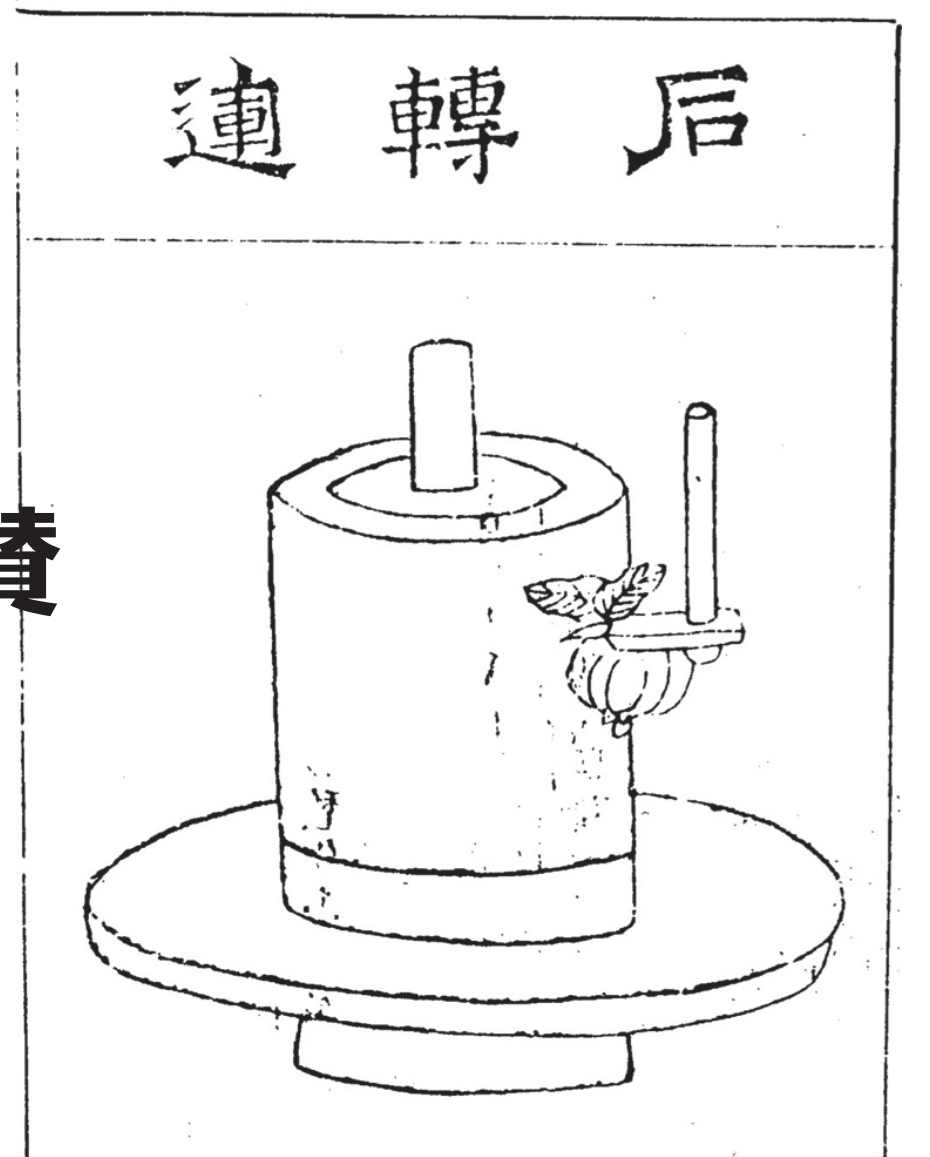
・青礫石は、痰を去り、熱を下げる効果があるとされ、効能を重んじた。朱権の『茶譜』には、茶磨に使用された石材として青礫(ぼう)石とある。「磨以青礫石為之、取其化痰去熱故也、其他石則無益於茶。」



国内に残存する茶磨

日本へは、南宋滅亡直前の13世紀末に茶文化とともに輸入された。その後、元代は貿易が沈滞し、明代になり復活した。

茶具図贊 茶磨



遺跡名	出土遺構	形態	直径	高さ	H/D	備考
野村美術館蔵	唐臼	8・7	18.7	15.4	0.82	輝緑岩
室生寺	唐臼、蓮弁	8・10	18.8	15.5	0.82	輝緑岩
一乗谷朝倉氏遺跡	井戸	8・13	19.7	13.0	0.66	輝緑岩
大和郡山城	城壁		17.0	18.3	1.08	砂岩
茶具図贊					0.99	

中国産
参考

国内には、発掘品・伝来品を含めて多数の茶臼が存在する。そのうち、中国産と考えられるのは、極めて少ない。

- ・日本にある茶磨は、輝緑岩と呼ばれている。桐山は、輝緑岩と言われるものは「輝石や角閃石が主に認められる塩基性岩」としている。
- ・『日本一鑑』：明の鄭舜功が豊後の大友宗麟のもとに嘉靖三十四年（1556）に約半年間滞在した時に、日本の国内事情を調べ、資料収集を行い、帰国した後、編集されたもの「器用門土産」に茶磨（1001番）：青礫石で出来た物 産地は山城である。
青礫石 = 輝緑岩 = 塩基性岩

結論

日本に残存する茶磨は、13世紀後半（南宋末期）に中国から茶・茶文化とともに輸入され、形態的な変化から一定期間輸入されたと考えられる。中国では、明代になり団茶の製造が禁止されたが、散茶を用いた点茶法は、しばらくの間続いたと考えられる。

注：ここでは中国産を茶磨、国産あるいは一般名称として茶臼を用いた